

8. 寄稿

南満州鉄道（満鉄）の旅

—アカシアの大連、リラのハルビン—

社団法人 日本環境測定分析協会
岡崎成美

はじめに

拙稿を記すに当たり、旅行から2年も要した。記したいことが余りにも多く、焦点が絞れなかったからである。今でも絞れていないが、遅くなるほど記憶も薄れるのでこの辺りで妥協とした。しかし、終りに近づくに連れ端折りが多くなったことは否めない。

[満州]

この旅行の前後で「満州」という地名をしばしば使ったが、戦後生まれの人には殆ど通用しなかったのは意外だった。

悪魔の飽食（森村誠一）、大地の子（山崎豊子）、赤い月（なかにし礼）といった著作物の舞台となった地域である。戦後生まれの人はこう言った著作物を読まないのだろうか。

中国東北部の3省（遼寧省、吉林省、黒竜江省）は1,932～1,945年の間は満州国として存在した（ただし、中国は認めていない）。

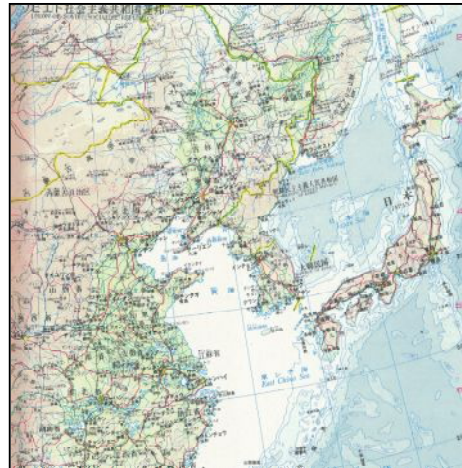
満州と言う歴史の舞台に立ってみたいと思ったのが本旅行の趣旨であるが、幸か不幸かそのような所はツアーのコースには入っていなかった。やはり、微妙な日中関係に配慮しているのだろう。唯一の例外として、旅順の203高地と東鶏冠山は訪れることができた。

ここは満州建国よりも古い日露戦争の舞台となった所であり、中国とは直接の関係がないからであろう。

国名の由来や建国の背景・歴史に言及するとキリがないし、勿論それだけの知識もない。

したがって、拙稿では歴史には極力触れないことにした。歴史に誘うとすれば、最近読んだルポルタージュの「観光コースにない満州」言うのが読みやすい。

発売元は(株)高文研、A5サイズ、254ページ、著者は小林慶二氏である。



満洲国地図

[大連、旅順]

' 7年、5月15日(火)午前、成田国際空港。
2日前に宅配便で送っていた荷物を受け取り、出国審査を済ませ出発ロビーへ行く。海外へ行くときは和食としばらくお別れのことが多い。和食党の私は成田空港で必ず、名残惜しげに食事をする。

今回は「ちばき屋」でラーメン(正確には和食でないかも知れない)を食べる。「ちばき屋」は私の勤務先・江戸川区東葛西に本店があり、行列のできるラーメン店としてTVで何度か紹介された。



高層ビルが林立している大連市街

また、某有名演歌歌手がヒイキにしており、東京にいるときは週に一度くらい食べに行くらしい。しかし、私の口には馴染まない。もっと美味しいと思う店はたくさんあるが、成田空港では仕方がない。

海外旅行のほとんどは家族のみで行っており、今回は久しぶりのツアーそれも20人という大きさだ。

大連・周水子(しゅうすいし)国際空港行き、成田発09:30、JAL797便は8割位の搭乗率だ。出発後しばらくして運航状況を表示する機内のTV画面をみると、ソウルの所が「漢城」と表示されている。ヒョットすると最初からそうになっていたのかも知れないが、日本の領空を出たのだなと実感する。ソウルは李朝時代には漢城(はんそん)と呼ばれていたが、戦後にソウル(首都特別市)と改称されてからは相当する漢字がないので中国、台湾では旧地名の漢城と記しているようだ。

3時間あまりのフライトで周水子国際空港に着陸した。出迎えのバスに乗ると若い現地女性ガイドのカー(日本には無い字で西の下に貝)さんが、このツアーは高いでしょと聞く。

理由を聞くと各人に成田で高性能のイヤホンを貸与されている上、車内ではミネラルウォーターのサービスがある。さらに、ホテルは全部5ツ星だからと言う。当然のことながら観光地では、中国内外の何組もの観光客がガイドをうけている。特に、近くで中国人同士がカン高い声で話していると聞こえにくいばかりか、耳障りではない。その点、貸与されたイヤホンは確かに良く聞こえありがたかった。

大連外国語大学日本語学科卒業のカーさんの日本語も完璧であった。風貌からしても最初日本人かと思ったくらいである。ガイドの日本語が下手だと聞く方は本当に疲れる。

大連外語大で最も人気があるのは日本語、逆に最も不人気なのはEUの某国。日本人は土産物をたくさん買うというのが理由であるが、某国人はほとんど買わない。ツアー客が必ず連れて行かれる土産物店での売上高により、ガイドのボーナスが決まるシステムになっているからだ。こういう背景から日本語学科には優秀な学生が集まる。

カーという名字は中国では少ないらしい。巨大な人口を有す中国の名字は多そうな気がするが約3千と言われている。韓国は2百ほど、金、朴、李の3つで60～70%を占めるという。世界で最も多いのは多言語・多民族国家のアメリカで百万以上、日本は世界2位で10～20万と言われている。

バスは最初の観光地である旅順に向かう。自動車道（と言っても中国では余り意味はなく、人も自転車もリヤカーも堂々と通行している）の両側にはアカシアが植えられている。

さすがアカシアの大連と言われているだけのことはあると思ったが、良く見ると開花シーズンなのに花を着けている木は滅多に見当たらない。不思議に思っていたがガイドの説明でその意味が分かった。アカシアにはアカシアとニセアカシアがある（ここまでは私も知っていた）。そして花を着けるのはニセアカシアのみである。したがって、植えられているのは殆どがアカシアということだった。

1時間程で日露戦争終結の会見場・水師営に着く。乃木将軍とステッセル将軍が会見した農家が、当時の資料をもとに1,996年に忠実に復元された。

佐々木信綱作詞「水師営の会見」（と言っても殆どの読者は知らないであろう）に出てくる「庭に一本（ひともと）棗（なつめ）の木」や「弾丸あともいちじるく」も復元されている。ただし、棗の木は当時のものは枯れ、その後に植えられた2代目も枯死寸前のため3代目が植えられている

（高さ1m程度）。建物の中は土間である。会見時の机と椅子が置かれた部屋、当時の写真を掲示した部屋では写真集などの土産品が売られている。

次の訪問地は日露戦争の激戦地であった203高地。名称は標高203mであることに由来する。駐車場から頂上までは約1,5km、緩やかな上り坂である。

今回のツアーは20人、殆どが満州にゆかりのある人で大半が70歳以上、どう見ても私たち夫婦が一番若い。最高齢は札幌から参加している92歳の男性、次は横浜から参加している86歳の男性である。頂上までは大変だから、駐車場で休んでいても良いとガイドが言うが全員頂上まで行き無事に下山した。92歳の人も杖も使わず、その健脚ぶりには驚くばかりである。道の両側の山にはマツ、ヒノキ、カエデ、サンショウ、ナラなど見慣れた木があり、やはり東洋だなと感じさせられる。

所々にある案内板には、日露戦争に関することが中国語と英語で書かれてある。中国語は略体化されているので理解し難く、私程度の英語力でも英語の案内板の方が理解し易い。

頂上・璽霊山（にれいざん）には砲弾の形をした記念塔が建っている。ここで激しい戦いをした



水師営の会見場



203高地、乃木将軍の次男戦死の場所

時の司令官である乃木将軍は203をもじって璽霊山と命名した。私の幼児期には、乃木将軍はこの戦いで2児を戦死させても勝利に導いた名将と聞かされていた。しかし、最近の研究では指揮が悪いばかりに、多くの戦死者を出したというのが定説のようである。

頂上から旅順港を眺め、日露戦争にしばし思いを馳せた後に下山して、やはり激戦地であった東鶏冠山（とうけいかんざん、文字通り鶏のトサカの形をしている）へ向かう。

2008年にこの近くでダボス会議（世界経済フォーラム）が開催されるため、周囲の環境整備を行っている。緩やかな上り坂の左側は、形の良い緑青色の見事な自然石で石垣が作られつつある、さすがに中国だと思いきや頂上付近ではまだ工事中でコンクリートのハリボテであるのにはがっかりした。ともかく、東鶏冠山頂へ着くと戦跡公園とでも言うような場所になっている。ロシア軍は1m位の厚いコンクリート壁で築かれたトーチカ（保塁）で守り、日本軍は容易には攻略できなかった。ある日、若き名将・コントレチンコ指令官が流れ弾に当たり戦死してからは、指揮系統が乱れたのを機にようやく陥落させることができた。

指揮官が悪ければ組織は弱体化あるいは壊滅するのは軍隊のみでなく、古今東西あらゆる組織に共通である。

203高地の頂上同様、この山頂にも日本軍が築いた記念塔がある。韓国では日本の香りがする建造物は、朝鮮総督府の重厚な建物を始め徹底的に破壊されている。のみならず20年位前にならうか、日本統治時代に釜山近くに植えられた見事な桜並木ですら切る、切るなの論争があったことを思い出した。結果はどうなったか知らないが。

このあと、大連、ハルビン、長春（新京）、瀋陽（奉天）と訪れたが日本が建造した建物は数多く残っているが、破壊されることなく大事に使われている。中国と韓国の国民性の違いなのだろうか。

山を降り大連市街へ向かう途中では、広大な工業団地の造成が行われている。赤土むき出しで、風が吹けば埃として舞い上がる。年々ひどくなっている黄砂の飛来は、砂漠や黄河流域の乾燥地帯のみが発生源ではなさそうだ。

大連市は日本が租借していたので正確には満州ではないが、大陸（満州）への玄関口であった。現在の人口は約580万人である。市街地でまず驚くのはロータリーと街路樹（アカシア、ニセアカシア、プラタナス、ヤナギ、ポプラ、スズカケ等々）が非常に多いことである。ロシア人の作った街・大連と後述する日本人の作った街・長春では感じが全く違う。

街路樹は数えることすら困難であろうが、ロータリーは52ある。中央ロータリーから大小10本の道路が放射状に出ており、それが更に分岐されている。直径200mの中央ロータリーを囲むように、日本が租借時代に建てた古めかしい、商社、銀行、ホテルなどのビルがあり今でも大事に使われている。主要な道路、公園、建物に付けられていた柳町、児童公園、鏡池、山形通りと言った日本名は、当然のことながら中国名に変えられている。

東本願寺別院、西本願寺別院、大連外国語大学などを見ながら旧日本人街へ向かう。

日本人街はリフォームされ高級住宅街となっている。この辺りに多いニセアカシアは純白の花が満開で芳香を漂わせている。これぞアカシアの大連と言ったところか。中国で住みやすい都市をアンケートすると、常に大連が一位というのもうなずける。北京で見られる自転車の大群もここではない。それどころか、1日半の滞在中に1台も見かけなかった。公共交通機関が発達しているのだろう。



リフォームされた大連の旧日本人街

大連港へ向かう途中、旧満鉄本社へ立ち寄る。現在は鉄路局として使われている。その前の歩道に残っているマンホールの蓋の真ん中には、アルファベットのMの中心にレールの断面を縦に通したシンボルマーク（ロゴ）がある。左右対称のなかなか良いデザインだ。



旧満鉄本社（現、大連鉄道本社）

満鉄は数々の歴史の舞台に登場する。元来、ロシア帝国が敷設したシベリアから満州北部と大連を結ぶ東進（とうしん）鉄道の路線のうち、ハルビンと大連を結ぶT字型の縦線の部分を言う。ロシアが所有していた頃の軌道は広軌（1, 520 mm）であったが、満州国が所有してからは標準軌（1, 435 mm、日本の新幹線と同じ）に改造されたが、在来線の狭軌1, 067 mmに比べると車内はゆったりとしている。

日本人が大陸への第一歩を踏み出した大連を入国管理事務所の屋上から見ると、市街地は高層ビル（主としてマンション）の建設ラッシュである。北京オリンピックをあてにしているのこのようだ。港には大小の船がひしめき合っている。しかし、水深が12mと浅く着岸可能な船舶は数万トン級までである。したがって、30年くらい前に30万トン級の船舶が着岸可能（水深は20mは必要）なように近くへ新港が建設された。近くと言っても35km位離れていると言うから、中国人にとっては40や50kmは離れているうちに入らないようだ。



旧満鉄本社前のマンホール。
レールとMを組み合わせたシンボルマークが見える。

入国管理事務所内は見学コースも土産物店もある。見学コースには戦前、日本人が上陸した時の写真などがある。殆どの女性が和服だ。

大連、瀋陽（奉天）、長春（新京）、ハルビンと言った主要都市には日本資本のヤマトホテルがあった。いずれも今なお存在し、立派に使われている。当然ながら名前は変えられている。例えば、大連のそれは「大連賓館」というように。戦前は高級ホテルであったが現在では3ツ星の大衆ホテルである。外壁は大理石と立派であるが部屋数は少なく、狭く、水やお湯が出たり出なかったりすると言うのでは当然であろう。安くても、まあ泊らない方が無難であろう。

また、主要駅の前には必ず大病院がある。日本が統治するために懐柔策として建設されたようである。診療項目として必ず「男性専科」と言うのがある。日本には「婦人科」と言うのはあるが、「男性専科」というのは見たことがない。後述するN社のH氏に聞いてみて分かった。正解は読者の想像にお任せする。

初日の夕食は「天天漁港」と言う名の店で海鮮料理だ。大きなヒラメの活き造りが出てきた。口をパクパクさせながら頭と尻尾はまだピクピクと動いている。新鮮さをウリにしているのだろうが残酷であり、すべきではないと思う。営業用としてこのような出し方は何時ごろから始まったのだろうか。私が初めて遭遇したのは1, 981年（昭和56年）、沖縄である。資源エネルギー庁からの依頼で、アルコール混合ガソリン（今で言うバイオガソリン）の研究を行っていた時のことである。トヨタのクラウン、ニッサンのセドリックなどを用いてエンジンの始動性、加速性、走行性、燃料系統（タンク、ホース、パイプ）に与える影響を猛暑期に約2週間テストを行った。

1日の疲れを癒すため、共同研究者と夜はオリオンビール。ある日、コザ（沖縄市）の割烹でクルマエビの活き造りが出てきた。尻尾はピクピク動いており、前足のツメは助けてくれと拝むようにくるくると廻している。どうしてこんな残酷なことをするのだろうと思いつつも食べた。最近では別に珍しくはないが、やはり良い気持ちはしない。

話をもとに戻す。隣席の86歳のご老人は毎月のように海外旅行をしており、何時ものように夕食前に下着の洗濯を済ませてきたそうだ。ご老人の荷物は小さなボストンバッグ一つのみというのにも納得できた。無精者の私には到底出来ることではない。このご老人のシタタカサはそればかりではない。チンタオ（青島）ビールを一本飲んだ後、老酒を注文した。ウエイトレスはボトル売りのみだと言うので一瞬躊躇していたが、私に向って「お飲みになりますか」と聞くので、お一人で無理ならばお手伝いしますよと返事すると注文した。私は2本目のビールが終わったので、「お手伝いしましょうか」と言おうとしたところ、老酒はすでにボトルの底から2cmほどしか残っていなかったので3本目のビールを注文した。結局、ご老人一人で空け2階からの階段を、しっかりとした足取りで下りて行った。

イヤハヤ恐れ入りました。

[ハルビン]

最近の教科書の地図を見ると、中国や朝鮮半島の地名はカタカナ書きである。その国の

発音に近くするということと、日本文字にないものがあるからであろう。長女が中学生の時、「ターチンでは石油が採れるのよね」と聞かれたことがある。一瞬戸惑ったが、それは大慶（タイケイと私たちの世代は言う）のことだと分かった。

しかし、私たちの世代でもハルビン、チチハル、フオフト、チベット、ラサ、ウイグル、ウルムチ、トルファンなどカタカナで記す地名もあった。元来、これらの地域は漢民族の支配下ではなかったので、現地の発音をカタカナで記していた。しかし、1,949年に中華人民共和国（中国）の建国後は、これらの地名もすべて漢字表記されるようになった。

ハルビンは私たちの幼少期はハルピンと発音していた。ハルピン、ハルビンのどちらが正しいのかを彼の地の出身である、N社（日環協会員）のH氏（父はモンゴル族、母は漢族とのこと）に聞いてみた。H氏によればどちらも正しくない、特に「ハ」の発音は日本語にはない。また「ピ」か「ビ」か二者択一ならば「ビ」に近い、したがって、ハルビンが満州族の発音に近いとのことであった。余談であるが箱根をローマ字で[HAKONE]と書くと、英語圏の人は「ヘイコン」と発音するそうである。

大連の周水子空港離陸後、1時間半ほどでハルビン空港に着陸した。離陸直後に配られたビスケットの袋はシワシワであったが、水平飛行に移る頃は気圧低下のためパンパンに膨れ人の頭ほどになり、今にも破裂しそうだった。

ハルビン空港は小雨であった。空港から都心へ向かう約20kmの直線道路の両端は薄紫のリラ（ライラック）の花が満開であった。360°どちらを向いても山は見えず地平線のみ、満州の大地を実感する。大地の恵みとして夏には米、大豆、トウモロコシ等々が収穫できる。都心から見ることはできないが、地平線の彼方の大興安嶺、小興安嶺と言う山岳地からはキノコ、キクラゲ（これもキノコであろうが）、タケノコ、ワラビ、毛皮類が恵まれる。

ガイドにこのような説明を聞きながら、マイクロバスで走っていると都心近くにきた。

ツアー客の一人が突然ガイドの説明を遮り、「ここはもう街中ですか」と聞く。父親が満鉄に勤務していたのでハルビンで育った姉（終戦時12歳）と弟（終戦時3歳）の姉の方だ。

それからは同乗者を無視し、ガイドに矢継ぎ早に質問している。終戦後3年してようやく帰国できたと言うから、懐かしいのは分かるが他人への気配りも必要であろう。身勝手な人だ、今後何かが起こりそうな気がした。

黒龍江省は面積は46万平方キロメートルで日本より広いが、人口は約4,800万人と少ない。省都・ハルビンの人口は397万人、満州族、漢



ハルビン駅前の女子医院



ハルビン駅前の男科医院

族、モンゴル族、朝鮮族などで構成されている。ごく少数ながらロシア人、ユダヤ人も居る。イスラエルの元首相・オルメルト氏の祖父はロシア革命で満州へ亡命したため、墓はハルビンにあるそうだ。

観光は帝政ロシア時代の街並みが残り、年中歩行者天国の中央大街「ロシア名はキタイ（中国人）スカヤ（大通り）」からスタートし、ウスリー江（松花江）沿いに幅100m、長さ2kmに渡り作られたスターリン公園へ行く。ここもリラや名前は知らないが美しい花が満開である。ウスリー江の中州にあるのは太陽島、「なかにし礼著の小説・赤い月」の主人公（なかにし氏の実母）と不倫関係にあった軍人がつかの間の逢瀬、いやそれ以上のことを楽しんだ家のあった所だ。なかにし氏は同小説に絶対に嘘は書いていないと言っている。

その島も今やレジャーランドに様変わりし、市民の憩いの場所となっている。真冬になるとウスリー江は厚さ2mの氷で覆われる。毎年1月25日から2月15日の間は氷祭りが開催され、日本人観光客もたくさん訪れる。

中央大街へ戻り1時間半の自由行動。デパートへ入ってみると外国高級ブランドの衣類、バッグ、スポーツ用品などが考えられないくらい非常に安く売られている。何かカラクリがありそうだ。次に中国茶の専門店へ行ってみると、驚くことに何と電子式上皿天秤がある。

他の商品の売店や露店では、日本でもう見られない棹秤りやバネ秤りが使われているのとは大違いだ。

中国茶で最高級品（高価）のプーアール茶を売っているのだから、目方に神経を使うのだろう。日本にも高級な抹茶や煎茶があるが、電子天秤で目方を計る店があるのだろうか。私は知らない。さらに驚くことに天秤には「ハルビン（実際は漢字表記）市政府検定済」のシールが貼られている。正確な計量を保証しているのだろう。



ハルビンの市場
ドリアン、パパイヤ、マンゴスチンなどのトロピカルフルーツ

夕食はロシア料理である。ボルシチ、ピロシキ、ペリメニ、プリヌイ、ピクルス・・・次々と運ばれてくる。すると件の老女が「これがロシア料理というの？違いますよ」と言い出した。彼女は渋谷のロシア料理店・ログスキーで出されるようなものを期待していたのだろうか。ツアーの料金ではそれは無理なことは明白である。私も石油会社勤務時代ロシア（当時はソ連）から原油船が製油所の棧橋に着岸すると、揚げ荷前に行う品質確認用のサンプルを採りに行っていた。それが昼食時と重なるとごちそうしてくれる。ごちそうと言っても硬い黒パン、うすいボルシチ、キュウリのピクルスなど粗末なものであった。それに比べると非常に贅沢だ。船員の服装も粗末で、タオルはガーゼのように薄いものであった。国家は宇宙開発や軍事費にお金を注いでいたためであろう。

話を夕食に戻すと例のご老人は黙々とウオッカをあおっている。

翌朝、レストランに牛乳は置いてあるが飲もうと思ってもグラスがない。ウェイターに言うところ飲むのだと指さす。それは幼児用のカップのように、両側に取り手のついた浅いものであった。なるほど、そう言えばTVでモンゴルの旅番組を見ると、馬乳酒はそんなカップで飲んでいるのを思い出した。元来、満州族には動物乳を飲む習慣はなく、モンゴル族がその習慣を持ち込んだことに起因するのかもしれない。

朝食後、ロシア正教の聖ソフィア聖堂へ行く。20世紀初頭、帝政ロシア軍兵士の軍用教会として創建された古色蒼然とした重厚なものである。今では教会としての機能はなく、博物館として公開されている。150年前まではウスリー河畔のひなびた漁村であったハルビンが、今日のように大都会に変遷する過程の写真、開発用具、新聞、衣裳等が展示されている。古い写真には味の素、森永弁当、明治キャラメル等の看板を掲げた店、風水屋、床屋、写真屋、鍔掛屋、人力車も見える。比較的新しい(と言っても60年以上も前の戦前)写真にはミスコンテスト(優勝者はロシア人が多い)、ウスリー河での水泳、ピクニック、葬列、中国南部から一旗揚げようと一家総出での引っ越し姿もあり、どこか郷愁を感じさせるものばかりである。



聖ソフィア聖堂

約2時間の自由行動となった。その土地の庶民の生活や経済力を理解するには市場を見るのが手取り早い。幸い聖堂の周辺はデパートや商店街が林立している。ハルビンの冬は氷点下30度にもなるため、東南アジアや中国南部のように屋台や露店は発達しておらず全部屋内のマーケットである。入ってみると豊富な食材(それも満州では採れないマンゴー、マンゴスチン、パパイヤ、バナナ、サクランボのようなトロピカルフルーツも含めて)、美術工芸品、日曜雑貨品などの店が数多くあり活気に満ちている。

ハルビンからはるか西方の山脈・大興安嶺でしか採れないという山菜類を土産に買う。

昼食はハルビン駅前のホテルで満州料理である。昼食後、満鉄へ乗車するために人員点呼を行うと件の姉弟が居ない。ガイドが慌てて探しに行き10分後位に無事に連れて帰ってきた。全員そろったので巾数十mの道路を隔ててあるハルビン駅に向かう。道路は人で埋め尽くされており、隙間をぬって渡らなければならない。全員が渡り終えた頃もう一度人員点呼が行われたら、件の姉弟がまた居ない。この人ごみの中では下手に動くとミイラ取りがミイラになる恐れがあるので、ガイドもじっと待つことにした。待つこと10分後位に現れた二人が悪びれた様子もないのには呆れ果てた。駅の古びた待合室で小休止の後、プラットホームへ出る。その際、人は金属探知機で荷物はX線で検査を受けるが鉄道では珍しい。ハルビン駅のホームでは伊藤博文初代朝鮮総督が、独立派の朝鮮人・安重根に暗殺されたが、その場所についての説明はなかった。中国人にとっては、日本人と朝鮮人の問題など興味がないらしい。

[長春（新京）]

ともかく、待望の満鉄に乗車した。ディーゼル機関車に引かれた17輛の客車と2輛の貨物車という20輛編成である。日本の新幹線が16輛、首都圏の快速電車が15輛編成であるのに比べると長く、緩やかなカーブに差し掛かると巨大な龍のうねりのようである。

しかも、速度は140～240 km/hと言うからかなりのものである。軌道幅は標準軌（日本の新幹線と同じ）でゆったりとしている。客車は2階建ての寝台車、軟座（いわばグリーン車）、硬座、食堂車で構成されている。私たちはもちろん軟座であるが、ベッドにもなる構造である。

中国の鉄道は日本の鉄道と同様、運行時刻の正確さで定評あるがそのとおりに定刻に発車した。しかし、満鉄の列車のトイレはタンクを備えていないので、駅構内では使用禁止である。ついでに言うと世界一安全な航空機は中国だそう。エーッとされる方も少なからうが、航空機の事故率は飛行時間または飛行距離から求めるのであろうから、国内線だけでも広大な国土には縦横無尽の路線があることを思うと納得できる。

駅構内を抜けると線路の両側は、5～10mの中で植えられているリラの花が満開である。すぐに途切れると思いきや、何と私たちの次の下車駅である長春までの242 kmがそうであった。驚きはそればかりでなく翌日、長春から瀋陽（奉天）までの305 kmもそうであった。その先は乗車していないので不明であるが、少なくともハルビン～瀋陽の約550 kmの鉄道の両側はリラの花で埋め尽くされており実に見事だ。日本では東京～神戸の距離に相当する。

乗務員の数も普通ではない。1分間隔くらい毎に車掌、警察官、売り子、清掃人らが廻ってくる。ワークシェアリングを行っているのだろうかと思う。

リラの向うは地平線の彼方まで一面の畑であるが、わずかながら水田も見える。5月中旬なので大部分が大地むき出しであるが、所々にコーリャンかキビらしきものが芽生え始めている。作物が収穫できるのは夏だけとは言え、これだけ広大な土地があるのだから食糧問題はなさそうな気がするが現実はそうではなく、すでに食料の輸入国になっている。やはり、人口が多すぎるのだろう。

グループの中に、茨城にある農水省管下の農業学校で教鞭をとっていた人が居た。風貌が映画化された「大地の子」の主人公・陸一心の父親役・陸徳志を演じた中国の名優・朱旭にそっくりなので、私たちは秘かに陸さんと呼んでいた。「陸」さんによれば水稻の作付方法は色々あるが、単位面積当たりの収穫量は日本式の30cm間隔位で株植えにするのが最大だそうである。耕地の狭い日本がうみだした生活の知恵だろう。

車窓からの景色も見飽きたので陸さん及び兄弟（兄は税理士、弟は元ホテルの支配人）で参加している二人（漫画家の藤子・F・不二雄に似ているので秘かに「ドラえもん」と呼んでいた）を誘い車内を探検することにした。まずは硬座車、当然のことながら座席は狭く硬い。しかも満席である。私たち4人は何食わぬ顔をして通過するが、やはり中国人

ではないのが分かるらしくジロジロと見られる。確かにこちらは興味本位で車内を歩いているのだが、あまり気持ちの良いものではない。

次に食堂車、メニューは一種類しかないのか全員が同じものを食べている。デパートのお子様ランチのように簡単な間仕切りのあるトレーに山盛りのご飯が盛られ、副菜はキャベツと豚肉を炒めたものだけである。

最後は寝台車、入るなり異様な臭いがする。寝台車の客は長距離移動なので、高価な食堂車を毎回利用する訳にはいかないのだろう。アチコチで色々なカップ麺を食べている。

そのほか得体の知れないもの（と言っては失礼か）を食べている。それらが臭いの発生源だったのだ。ハプニングもあった。疲れているのか熟睡している男性客がいて、その毛布がめくれており下半身がむき出しになっている。習慣的に就寝時に下着を付けない地方もあるようだが、彼はその地方の出身なのだろうか。ともかく私たちは顔を見合せた後、目を背けた。

車内探検も終わったが、まだまだ満鉄の旅は続く。退屈なので件の姉弟とも話をした。

親は満鉄に勤務していたので良い生活をしていたが、終戦で一変した。空腹を満たすために毒でないものは動物、植物を問わず何でも食べた。残留日本人でお互いに助け合い、就学年齢に達したのものには教育開始、就学中のものには引き続き教育が行われた。しかし、教師が不足している。国語は誰でも教えられる、数学は技術者、英語は銀行員、化学は薬剤師と言うように正式な教員免許は持たないが得意な分野を担当して行われた。

困ったのは帰国してからである。同級生と同等の実力はあっても、日本の学校教育を受けていないと言う理由で編入が認められない、1年生からやり直しと言うのが文部省の方針だった。折衝に1年位要した後、ようやく編入が認められた。その逆のケースを私は知っている。勤務していた石油会社でのことである。生年月日を見ると私と同期入社になるはずなのに1年早く入社している。聞いてみると樺太（サハリン）から帰国して編入試験を受けたところ、成績が非常に良かったので1年上の学年に入れられたとのことである。中国地方の某県である。

ようやく長春へ到着した。日本人が作った街だけあって大連、ハルビンとは趣が違う。

旧満州国の首都（当時の呼称は新京）であった長春は人口272万人、「長春常在春（長春には常に春がある）」と言われているだけあって満州の中では住みやすい所ようだ。

高層ビルが少ない中でひととき目立つのは、名古屋城を模して造られた旧関東軍司令部であり、現在は中国共産党吉林省委員会本部として使われている。

駅前の中央ロータリーを中心に6本の道路が放射状に出ている。駅前ロータリー廻っていると私たちのバスの前にタクシーが割り込んできてビックリさせられたが、間一髪で事なきを得た。運転マナ



名古屋城を模して作られた旧関東軍司令部

一の悪い人はどこの国にもいるもので、中国の交通事故死者は年間約10万人と言うから大変な数だ。日本は6千人位か。日本人が設計したせいか街路樹はポプラ、ヤナギ、それに松と私たちに馴染みのものが多い。

夕食は韓国料理である。ウエイトレスはチマ、チョゴリの朝鮮民族衣装である。テッキリ朝鮮族と思いアンニョンハセヨ、カムサハムニダなど知っている朝鮮語を並べてみたがキョトンとしている。何のことはない、中国人が朝鮮族の衣装をつけているだけであるからだ。階段を昇降する際にチマの下に見えるのはGパンであり、本来のカルソン様のものとは違う。このようなことは東南アジアの日本料理店でもよく見られる。ウエイトレスが浴衣を着ているので日本人かと思いきや、大抵はチャイニーズである。

長春は観光資源に乏しいせいか、ここのガイドは世相について多く話した。国の統治か国民の安全確保か知らないが公安を司る役所は国では部、省では庁、市では局となる。

共産党員（全国で約8,000万人）でないと出世できないので、入党申請してもコネがないとまず認められない。しかし、ものは考えようであり偉くなると頭を使い猛烈に働かなければならないから長生きできないと言う。どこかの国とは大違いだ。

コネ社会は中国共産党だけではない。中国では新暦の年末年始、旧暦の正月、5月のメーデー及び10月15日の独立記念日前後は長期の休みになる。その際は、必ず帰省し親孝行をしないと白眼視される。ところが、巨大な民族の大移動であるから鉄道の切符を入手するのが至難である。幸いにもガイドは旅行業なのでコネで入手できる。

経済は自由化が進み、今は銀行預金よりも株式投資が盛んになってきた。業績に無関係、とにかく安い株を買うのが儲けるコツと言う。

中国の有名10大学のうち、難易度8番目が長春大学であり学生数は5万人を超える。

学費は5,000元/年、寮費は1,500元/年、生活費は10,000元/年、と言うから平均年収15,000元/年のサラリーマンにとっては大変であり減多なことでは進学させられない。因みに1元は約16円である。

前述した農業技術者の「陸」さんは長春で生まれ、9歳で帰国するまで育った。通っていた小学校（当時の呼称は国民学校？）が偶然にもホテルの近く、徒歩で15分位の所であることが分かった。半日だけツアー一行と別れタクシーをチャーターしてその付近に行ってみることにした。午後、合流したので聞いてみると、残念ながら小学校は見つからなかった。近くにいた老人にも聞いてみたが結果は同じであった。

さらに、もう一組みの姉妹うち70過ぎの姉が幼時、ホテルの近くで生活したことがあるので「陸」さん同様、タクシーをチャーターして探したがやはり見つからなかった。60年以上も前のことだから無理もない。

ツアーの本体は満州国皇帝・愛親覚羅溥儀（あいしんかくらふぎ）の宮殿であった偽皇宮（ぎこ



ラストエンペラー溥儀の玉座

うきゅう) へ行く。中国は満州国の存在を認めていないので、偽皇宮・すなわち偽物の宮殿と呼んでいる。執務室、応接室、食堂、寝室等があるが一国の皇帝が住んでいたにしては狭く質素である。しかし、歴史的背景をみれば当然かも知れない。

皇帝・溥儀は数奇な運命をたどっている。実際はたどらせられたと言った方が正確であろう。不謹慎かも知れないが、傍から見ると面白い人生をたどっている。弟の溥傑(ふけつ)は日本の嵯峨侯爵家の長女・浩(ひろ)さんと結婚し、二女を授かった。長女・慧生は昭和32年(1957年)、学習院大の同級生と伊豆の天城山で死体で発見された。心中とされたが、真相は不明で多くの謎に包まれている。2年後の昭和34年、母・浩さんは自伝「流転の王妃」を文芸春秋社から出版しベストセラーとなった。この中では二人の娘についても触れられている。

次は李香欄(山口淑子)はじめ数々の名優、名監督、名画を排出した満州映画製作所(満映)の見学である。庭に植えられているヤナギの花が風に舞い、風情をさそう。屋内には戦前のスターであると思われる写真が飾られてあるが、李香欄、長谷川一夫といった日本人のものは一枚もない。当時は今のように録音技術が発達していなかったので波、風、雷、荷馬車などの音は様々な器具を使っていわゆる擬音を作った。その器具が残っており、擬音作成を体験させてくれる。無声のスクリーンの動きを見ながら私は雨、妻は風に挑戦してみたが早すぎたり遅すぎたりでなかなか難しい。

映画の全盛期であった昭和30年前後、多くの映画はここで育った監督の作品であることをここで知った。

午後、再び満鉄に乗り瀋陽(奉天)へ向かう。長春駅の待合室は清潔でとてつもなく広い。前述した民族の大移動の時はこれでも人で溢れるようだ。

[瀋陽(奉天)]

ハルビン～長春間は寝台車の軟座であったが、今度は4人席、テーブル付きのボックス



偽皇宮内部
溥儀と日本軍人のロウ人形



偽皇宮内のゴミ箱
リサイクル可能品と不可能品が分別されている



長春映画社(旧満映)
庭に立つ白亜の毛沢東像

型軟座だ。テーブルの上には直径約30cm、用途不明のステンレス製皿が置いてある。

近くの席の中国人がお菓子の空き箱などをそれに入れていたので、屑入れだと分かった。

お湯を入れたポットは床に置いてある。安全性を考慮してのことかも知れないが、私たちの感覚からすると置く位置が上下逆だろう。

瀋陽に近づくと、巨大な発電用風車が数百基見えゆっくりと回転している。自然エネルギーの開発に力を注いでいることが分かる。

日没が近づくにつれ、太陽が紅く見え始める。「紅い夕陽の満州」と歌われた光景を楽しみにしていたが、日没前に瀋陽駅に到着したため完全なものを見ることができなかった。

少し早いけど早速夕食だ。「美食城」と言う何とも大げさな名前の飯店である。メニューは「吉菜料理(きっさいりょうり)」、中国東北部の代表的な料理で地元で採れる野菜が中心である。アッサリしていて日本人にも食べやすい。ビールは長春で作られている「雪花」、苦味が少なく飲みやすいが、少し物足りない気もし老酒を追加する。

瀋陽は北朝鮮との国境が近いので、日本領事館にも一家が逃げ込んだことがあるように脱北者の駆け込みが多い。

起床すると素晴らしい五月晴れで空は美しい。しかし、少し前まではこうではなかったようだ。自動車を始めとする重工業が発達しているため豊富な石炭を多用し大気汚染がひどかった。2008年の北京オリンピック開催が決まり、瀋陽はサッカー会場になったため、石炭の使用を禁止し汚染は改善された。

ツアー開始までに少々時間があつたので、ホテルや駅周辺を散策した。こここの遼寧賓館(旧大和ホテル)には主要な宿泊者名が掲示されている。最初は毛沢東、周恩来と言った中国共産党幹部、次に蒋介石らの中国人、ロシアやベトナムの共産党幹部、最後に日本人であった。

戦前、師範学校を卒業したばかりで徴兵されたT少尉(妻の父)は奉天の街を馬で巡回していた。

すると、ハルビン郊外で憲兵教育を終えたばかりの一隊が駅の方から行進して来ている。馬上から見るとどこか見覚えのある顔が目についた。近づくると何と実弟(妻の叔父)であった。オオーッ、こんな所に来ていたのかと二人が驚いたのは当然である。兵隊の駐屯先は余り公表されていなかったようで、身内でも良くは分からなかったらしい。

それからは二人の休日が会う時には時々会うことができたようだ。



長春～瀋陽間の満鉄車内
ステンレス製皿は屑入れ

遼寧省(瀋陽市)成立七十五周年
接待中外重要歴史人物百人録

下宿者姓名	下宿時実務職務或責任職務	下宿時間
毛澤東	中央人民政府主席、國家主席	1958.2
周恩來	政務院(國務院)總理	1951.1
劉少奇	全國人大委員長、國家主席	1955.11
朱德	解放軍總司令、全國人大委員長	1957.4
董必武	政務院副總理、全國人大副委員長	1959.9
賀龍	國務院副總理、軍委副主席、元帥	1953.10
陳毅	外交部部長、國務院副總理、元帥	1956.10
彭真	中共中央東北局書記、全國人大委員長	1957.10
陳雲	東北局副書記、政務院副總理	建國初多次
薄一波	國務院副總理	1959.3
葉劍英	解放軍總參謀長、大將	1958.2
蘇聯	全國總聯主席、人大副委員長	1958.9
林彪	東北軍區司令員、中共中央副主席、元帥	解放初多次
高崗	中共中央東北局書記、中央人民政府副主席	建國初多次
鍾秉石	中共中央華東局書記、中組部部長	建國初多次
孫少雲	奉天副市長、國務院副總理	1956.10

瀋陽の旧ヤマトホテル宿泊者。
毛沢東、周恩来といった名前が見られる

一般に憲兵は恐れられていたようだが、このT憲兵はやさしかったようだ。20～30年位前の地方紙に、今日の自分があるのはT憲兵のお陰だと言う一文が投稿されていた。

また、機転もきいていたようで敗戦を知ると仲間一人といち早く脱出し、満州から中国へ移った。そこで、生活の糧を得るため小さな食堂を始め中国人4名を雇った。そこに中国人がもう2人来て雇って欲しいと言うが、そんなには要らない。不要（プーヤオ）と断る。当時は中国人を虐待した日本人の摘発が盛んに行われていた。断られた2人は恨みをもって、食堂経営者は中国人を虐待していたとありもしないことを当局に密告した。食堂経営者の2名は逮捕され拘留された。拘留所で残虐極まりない拷問を日本人が受け、それを見せられ次はお前たちだと脅される。昼夜を問わず苦痛に苦しむうめき声が聞こえるが、やはり潔白だったせいかな不思議と恐怖感はなかったそう。やがて、何事もなく疑いが晴れたのか1ヶ月後には釈放された。こんな所では商売はとてもできないと思い、店を放置し2人で何とか日本までたどりついた。

T元憲兵とは冠婚葬祭で何度もあっているが、こんな話は私が満州旅行をしたと言うまで聞いたことはなかった。

一方、兄のT少尉はその後、台湾に送られたがやはり無事帰国できた。

さて、話をツアーに戻す。瀋陽は古代から文明が発達しており、清朝初期の都が置かれていた所でもあるから歴史的遺産も多い。

最初は遼寧省博物館である。展示品は古代の青銅器、絵画、彫刻、陶磁器等々見事なものだ。

次に訪れた瀋陽故宮は、清朝初期の皇帝の居城を復元したものである。少数の満州族が支配していたため、漢族やモンゴル族の文化にも配慮した建造物となっている。異民族の文化や宗教を尊重するのは平和の基本である。それがないと最大の愚行である戦争が起こる。

第3代皇帝はここで行われた即位式の時、数千人のバンザイの大合唱に驚き失禁したという逸話が残っている。わずか6歳では無理もない、自分の置かれている立場や何が行なわれているのかも分かりはしない。

故宮の外は清朝時代の街並みが復元され、レトロな雰囲気である。

最後は皇帝の墓陵である北陵だ。この前の広場では凧あげが盛んに行われている。絵模様は日本の人気アニメ・ドラえもんなどが多い。

都心へ戻り、最大の繁華街である太原街を自由



瀋陽故宮
八角形はモンゴルの包（パオ）を意味している



北陵前の露店

散策する。似たような店が多いが人通りも多く活気がある。

最後の夕食は、ホテルインターコンチネンタル瀋陽内のレストランで広東料理だ。中華料理は北へ行くほど、また南へ行くほど私の口には合わないが広東料理は南でも食べやすい。

数々の貴重な経験をした満州6日間の旅を終え、市街地から数十kmの直線道路を走り、瀋陽空港へ到着した。夕刻、成田へ着いたが札幌から参加していた92歳のご老人は、疲れているわけでもないが急ぐ身でもないので成田に一泊して帰るとのことであった。